慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	David T. Sugimoto, Female figurines with a disk from the southern Levant and the formation of monotheism
Sub Title	
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2008
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.77, No.2/3 (2008. 12) ,p.181(361)- 186(366)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20081200-0181

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

David T. Sugimoto, Female Figurines with a Dish from the Southern Levant and the Formation of Monotheism, Keio University Press, Tokyo, 2008

小川英雄

(一)

紀元前の古代イスラエル、或は古代パレスティナの歴史には、二つのアプローチの方法がある。一つは旧約聖書中の歴史記述に基くものであり、他は現地での発掘調査である。前者は旧約学と呼ばれ、旧約聖書の主要な言語であるヘブライ語の学習を基礎とする。それに対して、後者は聖書考古学、或はパレスティナ考古学と称される。本書の著者杉本氏は米英の大学に留学して旧約学により学位を取得したし、他方では、イスラエルの諸遺跡で発掘経験を積んできてばかりでなく、一昨年にはイスラエル考古学界で広く名の知れた、ヘブライ大学のアミハイ・マザール教授[1]の指導も受けている。

従って、杉本氏が今回の労作、すなわち考古出土物である、いわゆるアスタルテ土偶のシステマティックな研究を行い、その結果の一つとしての枠付き太鼓を持つ女性土偶を、聖書中のヤハウェ神崇拝の動向と結びつけて論じた英文著作を完成したのは当然であり、国際的に見てもその資格は十分にあるものと考えられる。

古代イスラエルの歴史の研究方法は上述の通りであるが、そのうち宗教史に限ってみると、旧約学と発掘調査結果の間には、これまでの研究史上において必ずしも親

密とは云えないものがあった。その主な原因としては、考古学的に発見される遺構や遺物には旧約聖書中の記載に対応するものが少ないという点が考えられる。とりわけ、古代イスラエル史の中核をなす鉄器時代（前一二〇〇年―前五八七年）については、考古学的に判明する宗教資料は著しく少ないと云わなくてはならない。それ故、これまでイスラエル宗教史の研究と叙述は旧約聖書中心に行われ、考古資料はほとんど無視されてきた。

例えば、杉本氏が本書の主題としている女性土偶は、通例アスタルテ土偶と呼ばれ、パレスティナの多くの遺跡で出土してきたにもかかわらず、それ等は先住カナン人の信仰対象物として軽んじられ、イスラエル宗教史の中に正しく位置づけられることがなかった。

日本オリエント学会は一九六四年から三年間にわたって、イスラエル中部の遺丘テル・ゼロールに発掘調査団を派遣した。当時、その「南のテル」のC地区の担当は、故定形日佐雄氏と私、そしてイスラエル側からはアミハイ・マザール氏[2]であった。C地区は全体とし後期青銅器時代の青銅産業址であり、そこからはアスタルテ土偶が二例出土し、そのうちの一つはほぼ完形品であった[3]。この青銅産業址は併出遺物（土器等）から、古代から銅の産地として有名なキプロス系のものであり、私見では出土したアスタルテ土偶はキプロスの女立法者・守護女神デモナッサがパレスティナでアスタルテの姿をとったものであった[4]。但し、テル・ゼロールからは、杉本氏のいう「円盤（ディスク）を持った女性土偶」は見られなかった。

このような学界の現状を顧みるならば、今回杉本氏が敢えて女性土偶を取り上げ、そのうち一つのカテゴリーである「円盤を持った女性土偶」について入念な蒐集を行い、そのコルプス（集成）を英文で作成したのは、上述のようなパレスティナ宗教史の流れから見て、驚嘆すべきことと云わなくてはならない。世界的に見て、パレスティナ出土の土偶のこのような集成は未踏のものであり、杉本氏の努力は学界全体から高く評価されるであろう。また、この種の土偶をアスタルテ女神崇拝にかかわるものであるとする結論も説得力があり、従来漠然とアスタルテ土偶などと呼ばれていたのとは異なり、学術的に確かな結果が導き出されている。

杉本氏は考古資料としての「円盤を持った女性土偶」の時間的、空間的広がりを調べ、それ等のイスラエル、フェニキア、トランスヨルダン、エドムにわたる分布を

確定した上で、旧約聖書の宗教、すなわちヤハウェ一神教との関係に説き及んでいる。このことは上述のようなイスラエル宗教史と出土資料との隔絶状態を克服していると評価することができよう。それによると、前一〇世紀と前九世紀の間に、ヤハウェ神崇拝の性格に重要な変化があったことになる。

(二)

「南レヴァント出土円盤を持った女性土偶と一神教の形成」の本文一一二頁は、六章と結論からなる。

第一章は研究史と方法論を扱う。杉本氏が本書で対象とする地域は南レヴァントであり、それはイスラエル、ユダ、アンモン、モアブ、エドム、フェニキアの各地方を含んでいる。この地域から鉄器時代に一神教が生まれたと考えられるが、他の神々が存在したことを思わせる証拠もある。それ等は旧約聖書、最近発見されたクンティレット・アジュルッドやヒルベット・エル・コムのアシュラ碑文などに散見されるが、代表的な多神教資料はアスタルテ土偶である。杉本氏が研究対象として選んだのは、そのうち円盤を持った土偶であり、アスタルテ土偶の中でも数が限られている。又、時代も鉄器時代のみに属する。

杉本氏はカナン・イスラエルの女神達の研究史を述べた後、円盤を持った女性土偶については、これまで集成されたことがないことを指摘する。更に、アスタルテ土偶の正体（遊具、死者像、呪術用など）についての諸説が述べられた後、円盤に関する三つの説（太陽、枠付き太鼓或はタンバリン、パンのかたまり）のうち、杉本氏は枠付き太鼓説を採用する。その際、他の著者たちが使うタンバリンという言葉は不適当なものとして放棄される。要するに、これは枠付き太鼓を演奏する人間の女性音楽家なのである。

研究方法の第一は、出土した円盤を持った女性土偶のすべてについて集成を行うことである。その際、考古出土物としてのコンテクストを重視する。南レヴァント内でも地域差があるからである。

第二章は、こうしてまとめ上げられた当該土偶の形態論である。それは製法に基づいて二つに分類される。一つは板状土偶であり、左手で円盤を持ち、右手は円盤の中央にあてられている。55例。杉本氏はD・R・ヒラーズの説に賛成して、このタイプは枠付き太鼓を女奏者が打ち鳴らしている姿であるとする。もう一つは棒状土偶

であり、その多くは中空の胴部を持つ。44例。そのうち、多くはフェニキアとトランスヨルダンに由来し、イスラエルからは五例のみ、ユダには見られない。板状土偶は後期青銅器時代以後発見され続けているのに対し、棒状土偶は前九世紀以後ペルシア時代までである。

第三章では、この種の土器の特異例が紹介される。この種の土器の中には、数は少ないが特異な図像を示すものがある。例えば、妊娠している場合、幼児を抱く場合、鳥を持つ場合などであるが、これ等は豊饒崇拝と関係している。これに対し、円盤は豊饒を意味するものではないという。又、二管の笛や竪琴を持つものがあり、前八世紀以後のフェニキア、フィリスティア、エドムなどでは、楽器を手にする土器のオーケストラがあったようであるが、杉本氏は円盤を持った土偶はこのようなオーケストラの成員ではなかったとする。イスラエル、ユダ、トランスヨルダンでは女性土偶の円盤奏者土偶は孤立した存在である。

第四章のテーマは円盤を持った女性土偶の考古学的出土状況であり、地域差と時間差に基づき、その分布が検討される。地域的にはまず、南レヴァントをヨルダン川の東側と西側に分ける。西側はユダ、イスラエル、フィリスティア、シャロン平野、フェニキアであり、東側はアンモン、モアブ、エドムである。このような区分に従って、板状土偶と棒状土偶を分類し、更にその年代（前一二世紀―前六世紀）を見ると、前九世紀が重要な変換点であることが分かる。次に、これ等の土偶の遺跡における出土地点を層位的に認識してみると、五つの出土遺構が挙げられることが分かった。すなわち、神域（儀式の場）、公共の場、公共建造物、個人の家、墳墓である。このうち、神域からの出土が最も多く、全体の半数以上を占めている。従って、円盤を持った女性土偶は個人的信仰のためのものにせよ、公共のためのものにせよ、宗教的奉納物かお守り札のようなものであろう。墳墓から出土する理由は不明である。結局、この種の土偶は前九世紀まではイスラエルを中心として見られるが、それ以後はフェニキア等他地域に流行するようになった。

第五章では、円盤を持った女性土偶の機能と本性が論じられる。枠付き太鼓を持つのはすべて人間の女性であり、女神ではない。旧約聖書では枠付き太鼓（現代語訳聖書ではタンバリン）は一七回出てくるが、それは三つのケースに分けられる。宗教儀式、宴会、復員歓迎式である。例えば、アッシリアに対する勝利の際に、女性の

太鼓演奏者が他の音楽家と共に奏するが、豊饒儀礼ではそのようなことは行われない。では、円盤を持った女性土偶が捧げられた神は誰であったのであろうか。杉本氏はそれは戦いの女神としてのアスタルテであったと結論している。墳墓からも出土するのは、アッシリア起源のイシュタル・タンムズ崇拝が、アスタルテ信仰と結びついたためかもしれない。他方、前九世紀以後、ユダとイスラエルから円盤所持女性土偶が姿を消すのは、ヘブライ人の土地で反アスタルテ崇拝が表面化したためであろう。

第六章は、円盤を持った女性土偶とイスラエル両王国の一神教信仰の関係を扱っている。上述のように、円盤を持った女性土偶はイスラエルでは前九世紀まで流布されていたが、ユダでは見られることがなく、王朝末に現れるだけであった。他方、フェニキアでは前九世紀から広く行われた。イスラエルではこの土偶の他にも、当時は様々なカナン宗教の痕跡が残されている。このような状況は鉄器時代イスラエル・ユダの一神教信仰の動向と一致している。つまり、ヘブライ人たちはヤハウェ一神教の信者ではあったが、前九世紀中葉までは単一神信仰的であり、カナンの男女の神々の属性を受け入れ、それ等をヤハウェ信仰に吸収、取り込もうとした。しかし、政治社会的情勢の変化は人々にそのようなカナン的要素の排除（差別）へと向かわせ、一神教を成立させた。

最後に結論があり、上記の内容が要約されている。円盤を持った女性土偶はアスタルテ女神崇拝のものであり、円盤、すなわち枠付き太鼓はこの女神の戦神的性格を示す。前九世紀中期まではイスラエルでも見られるが、その後はフェニキア、トランスヨルダン、エドムなどに分布した。このような歴史はイスラエルにおけるヤハウェ一神崇拝の確立過程と対応している。すなわち、前一〇世紀まではヤハウェ崇拝による戦の女神の神性の取り込みが起こっていたが、前九世紀にフェニキアのバール、アスタルテ崇拝が正面を切って導入されると、カナン的宗教要素の排除へと向かう動きが起こった。これがヘゼキア、ヨシアの改革である。

㈢

本書には入念に考えられた図表（特に第一回と第三回）と分かりやすい図版（手書き並びに写真）が多数掲載されており、理解を助けてくれる。又、巻末の付録に収められた出土土偶一覧は、文献案内付きの有用なもの

である。

なお、本書とほぼ時を同じくして、杉本氏は日本語による「図説　聖書考古学　旧約篇」[5]を刊行したが、その中に本書の内容を要約した部分[6]があり、本書の理解を助けてくれる。

アスタルテ土偶と同じく、オリエント（アナトリア）に起源を持つ大地母神キュベレ（クババ）は後に地中海世界・ヨーロッパに伝えられたが、杉本氏も本書で触れているように、共通の図像的要素として共に円盤を持っている。キュレベの場合はタンバリンとされている[7]。キュベレとタンバリンの図像的結びつきは、杉本氏によればローマ時代とされるが、その証拠は遅くともギリシア古典時代までさかのぼることは確かである。

本書二頁上から四行目の Fica-tion は Fication、77頁下から四行目の which は whom、同頁注14の一行目 god は goddess であろう。

注

（1）牧野久実氏との共訳で、A・マザール「聖書の世界の考古学」リトン、二〇〇三を刊行している。

（2）当時は大学院生。

（3）テル・ゼロールからは、その他に墓域の石棺墓（初期鉄器時代）からもアスタルテ土偶（ほぼ完形品）が出土した。テル・ゼロールのアスタルテ土偶については、大畠編「テル・ゼロールⅡ・一九六五」日本オリエント学会、一九六七（英・和文）、図版四七、一―四。又、一八、三二、四七―八頁参照。

（4）小川「イスラエル考古学研究」山本書店、一九八九、一一四―一一六、一二九―一三二頁、又小川「古代テル・ゼロール―その集落と宗教―」西南アジア研究、三〇、一九八九、七四―七五頁参照。

（5）河出書房新社、二〇〇八。

（6）一神教について、又女性土偶について、七九―八四頁。更に、「史学」七〇、二〇〇一の杉本氏の論文「円盤を持った女性土偶」参照。

（7）M・J・フェルマースレン（小川訳）「キュベレとアッティス―その神話と祭儀」新地書房、一九八六、三七頁、四四頁等、又 Lynn E.Roller, In Search of God the Mother, the Cult of Anatolian Cybele に対する私の書評、「史学」七〇―一、二〇〇〇、一一六頁参照。